

〈研究ノート〉

近代日本アジア主義とその中国における 受容と再解釈

——李大釗の「新アジア主義」を中心に——

何 金 凱

はじめに

18世紀半ばから19世紀にかけて起こった産業革命をきっかけに、世界は大きな転換期を迎えた。欧米諸国は近代化社会に移行してから、世界の植民地化は進んでいた。日本が帝国主義時代において植民地化されないように、アジア諸国と「連帯」するか、欧米列強と同等な地位を取るか、という選択があった（渡辺，2006：39）。明治維新以来、日本は欧米文明を取り込み、日本伝統文化を憂慮すると同時に、中国など他アジア諸国に同情や蔑視の言論も存在していた。1885年の福沢諭吉は『時事新報』に「脱亜論」を発表し、「左れば、今日の謀をなすに、我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予ある可らず。寧ろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従って処分すべきのみ」と、アジアから離脱することを提唱した（福沢，1885）。後に日本は列強に追隨する「脱亜入欧」のスローガンの下、進んだ欧米社会を追いかけるようになった。

17世紀の終わり頃から19世紀の半ば過ぎにかけて、欧米諸国と日本が次々と国民国家として世界に台頭した。当時の国民という概念は人種とい

う概念と結びつき、現在の視点から見ると科学的根拠のない人種概念が、帝国主義時代では普遍化された（飯倉，2013：8）。欧米諸国における人種差別の壁により、日本の「脱亜入欧」は叶わず、それを受けて日本の思想界では「脱亜」から「入亜」へ転換する理念も生まれた。国際環境の影響を強く受けた当時の日本社会を揺るがす思想の中から、「アジア主義」の萌芽が明らかに認められる。

19世紀以降、日本に渡る中国留学生は中国近代史及び中日関係に多大な影響を与えた（丁相順，2001：129）。中国東北財經大学講師・王玉珊（2010）により、1896年から現在までの中国における日本留学風潮を五段階に分類している。第一段階は1896年～1911年であり、第二段階は1912年～30年であり、第三段階は1931～45年であり、第四段階は1946年～76年であり、第五段階は1977年～現在である。本稿は戦後の留学風潮を取り上げないようにする。1894年～95年の日清戦争で中国が戦敗し、戦後、日本へ留学することは清国を救うための行為と考えられるようになった。1912年～30年は日本留学の隆盛と変動の時期であった。国家の未来を建設するため、および救国の道を見つけるためという二つの目的が、この時期の中国の若者が日本へ留学することを決意した主要な動機であった。1931年～45年の日中戦争は中国における日本留学のあり方に重大な影響をもたらした。中国国内の政治的な迫害を避けるために日本へ留学する人もいたが、その後、中日両国が断交することにより日本留学も中断されることになった。（王，2010：11-1104）

日本に渡った中国留学生たちは日本の最新思想に限らず、西欧の書籍から日本語に翻訳されたものからさらに中国語へと大量の翻訳を行い、最終的に中国国内に広め、当時の中国社会に大きな衝撃を与えた（王曉雨，陳其松，2019：20）。しかし、外来文化が伝播する際には、文化や価値観の違いに起因する摩擦や論争が発生しやすく、旧来の本土文化による抵抗が生じる可能性も高まった（平野健一郎，1991：625）。論争が巻き起こるに伴い、中国社会も推し進められると考える。丁相順によれば、1872年に清

政府が初めて留学生を派遣し、当時は主に欧米諸国へ行った。しかし日清戦争後、日本の勝利により、日本へ留学するのは潮流になった。丁も前述した王と同じ意見を持ち、留日学生 of 最初目的は先進知識を学びながら、救国の道を探すというのである。

中国人留日学生は革命的志向の伝統があると言われ、彼らは活発な社会活動を行い、数多くの組織と雑誌を作った (周一川, 2020 : 72)。革命という単語は旧王朝を覆し、新王朝を建設するという意味を持っている。しかし、最初に日本へ留学する学生たちは、また清国を変えなければならないという志をもつのが多かった。1898年後革命失敗の亡命人は日本に渡り、在日留学生に革命理論を宣伝した。その後留学生たちも徐々に政治活動に参加するようになった (丁, 2001 : 128-130)。

本研究は中国20世紀前半における革命活動に参加する訪日中国人、特に李大釗に注目する。20世紀前半における日本の影響を受け、李大釗と「アジア主義」との関わりについて検討を試みたい。

本稿の構成は冒頭に18世紀半ばからの中国における数度の戦争を交えた社会状況を明らかにし、中国の日本文化受容へと至る経緯を詳察する。そして、日本近代社会を貫く「アジア主義」が生まれた背景と「アジア主義」概念を概説する。アジア概念の成立から「アジア主義」の形成と発展に議論を移し、孫文の「大アジア主義」に関する演説の中心思想を分析する。李大釗の言説から本研究で主に検討する李大釗の「新アジア主義」と、「アジア主義」から転じた孫文の「大アジア主義」との関わりと、最終的には孫文の「大アジア主義」思想の影響を受けた李大釗を中心に、李大釗が唱えた「新アジア主義」の形成過程を分析する。

1. 先行研究

李大釗を研究する際に、キーワードはほぼ「マルクス主義」の伝播、孫文の「大アジア主義」と比較するのに集中している。そのうち、関偉

(2003)と韦英思(1995)の研究は外観的に李大釗の「新アジア主義」と孫文の「大アジア主義」との比較を描き出した。関(2003)によると、李大釗は「新アジア主義」を提出する理由はいくつかの点と関連している。①マルクス主義の影響；②ロシア十月革命の影響；③孫文の大アジア主義の影響；④アジアの侵略された国や地域の影響。李大釗は孫文が提唱した救国に感動したが、孫文が提出した「大アジア主義」のある主張は日本の「大アジア主義」と接近するのにも気づいた。1919年から李大釗は雑誌に「大アジア主義」に関する批判の論説を発表してから、孫文も日本の「大アジア主義」の侵略本質を指摘するようになった。李大釗と孫文の関係が親密であるため、互いに影響をするのも可能である。

韦は違う視点から二人の「アジア主義」を論説していた。韦(1995)は、二人の「アジア主義」ともに帝国主義国家の侵略に反対するためのものであると承認した。しかし、孫文の「大アジア主義」は欧州列強の侵略圧迫に反抗し、李大釗の「新アジア主義」は主に日本の帝国主義の侵略拡張を批判すると指摘した。両者は民族解放に触れたが、李大釗がマルクス思想から受けた影響もあるため、徹底的な民族自決を提出した、と韦(1995)は述べていた。孫文は講演『大アジア主義』の中ではアジア伝統文化の地位と役割を強調し、アジアとヨーロッパの文化の相違点を指摘し、アジアはいかに植民地になったかも分析した。同じく李大釗も東西の民族差異と戦争の根源を分析した。しかし、李大釗は文化的な分析にとどまらず、より深刻的な経済根源から述べた。李大釗は経済的な面から分析するのは解決策を掘り出す原因が存在すると指摘し、孫文より深刻的であり、長い目で中国革命を計画していた。

本文の焦点は李大釗の「新アジア主義」と孫文の「大アジア主義」を比較することにあたり、主に李大釗の「新アジア主義」の形成過程を中心に検討する。

2.1 アジア主義の概念

「アジア主義」を検討する際には、まず「アジア」の概念を確認する必要がある。

「アジアとは何か」、この問いに対する答え、まず出てくるのは地理的概念である。地理的に見ると、アジアとは六大州のひとつである。また、アジアは、ユーラシア大陸のウラル山脈からカスピ海、黒海、地中海、紅海を結んだ線以東の地域を指す。しかし、この概念はあくまでもヨーロッパがアジアへ進出することに迫り着く必要がある。

「アジア」という言葉はアジア人自身によって作られたものではなく、西洋から伝来した概念であり、西洋が世界区分を使う言葉である。紀元前8世紀から紀元前7世紀頃、古代メソポタミアのアッシリア人がエーゲ海の東を「アス (asu)」（日の出の意）、西を「エレブ (ereb)」（日没の意）と呼称した。のちに「アス」にラテン語の接尾辞「イア (ia)」がついて「Asia」の語が生まれたといわれている（星野，1992：10）。

1602年、マテオ・リッチは中国で『坤輿万国全図』を刊行し、1606年には初めて日本に伝えられた。その後、日本が明治維新を通して急速に発展し、西洋化・近代化の快速に乗り、徐々に西洋から伝来した「アジア」という呼称が一般化された。また、このような西洋勢力が東に侵入したことを背景として、本来、中国や日本と他地域の概念が、ヨーロッパと非ヨーロッパ地域の概念を代替させた。世界文明中心地と経済中心地はヨーロッパへ移転し、巨大な落差とヨーロッパの進出に迫られたことにより、共同の危機や同一性を認識し始め、「アジア」という共同認識が強まった。

その結果として、「“ヨーロッパ主義”なる者の内容が問われることがないままに、ヨーロッパに対抗的に自らの存立を主張する“アジア主義”が形成されることになった」（狭間，2001：69）。このように、「アジア主義」が実に内含しているものはヨーロッパと対抗する点である。日本における「アジア主義」は、一つの集団意識とも言い、「黄色人種」の運命共同体認

識である（三輪，1973：386）。ヨーロッパの進出という外来圧力に直面する際に、自己防衛や保全するために誕生した対策であり、人種、文化、独立とも深く関わっている。

「アジア主義」を言及すれば、「大東亜共栄圏」の下でアジア各国人民へ悲惨な記憶を与え、戦争中日本が侵略の粉飾というイメージがまだ残っている。地理的に言えば日本はアジアの国というのは一般認識だが、当時の欧米列強と同じ立場を取り入れ、アジア諸国に対する優越感や指導意識を持ちながら、対外進出が行われた。日本は欧米諸国のアジア侵略に対して、アジアを解放するという宣言を提唱しながら、日本によるアジアの盟主になる使命や必然性も主張する一方で、帝国主義的な侵略をしていた。藤井昇三が「アジア主義」の転換を「アジア連帯による欧米支配下からの解放を目指す方向と、『大アジア主義』の名の下にアジア侵略を偽装する方向との二つに大きく分岐していったと私は考えている」と述べている（藤井，1985：414）。彼は「アジア主義」を「連帯」と「侵略」というような二つの方向を明確に提起した。

アジア主義の定義について様々であるが、本研究主には橋川文三の定義を参考にする。橋川（橋川，1985：1148-1149）によって「アジア主義」を「欧米列強のアジア侵略に対して、アジアの団結を図ろうとする主張」として定義し、現在多数の研究者が受け入れている。

2.2 アジア主義の形成と発展

2.2.1 アジア主義の形成

「アジア主義」は明治前期ではまだ個々に散在している、未統一の主張である。最初に最も代表的なのは興亜会である。興亜会はアジアの提携振興を目標として設立されたが、「会員は極めて雑多であり、性格は純一ではない」（山田，1969：49）、会員間の分岐は免れず、明確に回答していない問題が多く存在した。

一方で、江戸幕府から日本の教養人は朝鮮蔑視という観念を発足し、その後も日本の国体論を支える思想として大きな役割を果たした(金, 2012: 29)。代表的に、吉田松陰はその朝鮮観の影響を受け、1850年代に著作した『幽囚録』の中では朝鮮が日本への帰属化をするのを表明しながら、満州や台湾の領有も主張した。

「日不升則昃月不盈則虧國不隆則替故善保國者不徒無失其所有又有增其所無今急修武備艦略具礮略足則宜開墾蝦夷封建諸侯乘間奪加摸察加澳都加論琉球朝 覲會同比内諸侯責朝鮮納質奉貢如古盛時北割滿洲之地南收台灣呂宋諸島漸示 進取之勢然後愛民養士慎守邊圉則可謂善保國矣不然坐于群夷爭聚之中無能舉 足搖手而國不替者其幾與」¹

これはのちにアジア進出の対外思想へ大きな影響を与えた。そして明治前期を経て、「アジア主義」の概念が徐々に確立した。

アヘン戦争から日本の思想界では激しい変動が起り、従来の「華夷思想」から離脱し、ヨーロッパに対する危機感によってアジアを連携し対抗するという思想へ変化した。「アジア主義」は対抗の中で提携と侵略の二重性特徴も生まれた。また、提携と侵略はいずれも中国と関係性が緊密であり、中国に対する姿勢の変化から「アジア主義」の変容も窺い知る。本研究は橋川文三の「アジア主義」がどのように変化するかの図式を参考にする。

(一) 欧米の圧迫→日・中両国の提携による抵抗→「日清同盟論」

(二) 提携国としての清国が無力であるという認識→清国の改造・強化の必要という判断→いわゆる「清国改造論」

(三) 帝国主義時代の開始→清国の強化を待つ暇がないという切迫感→

1 吉田松陰, 1854, 『幽囚録』原文はインターネットを参照している。

提携の切捨→「脱亜論」

(四) 先進帝国主義勢力への同調→「中国分割」への志向→日清戦争→侵略論(橋川, 1973: 23)

2.2.2 アジア主義の発展

アヘン戦争の結果は疑いもなく日本の思想界へショックを与えた。また、千歳丸により、多くの知識人は清国の現状を自らの目で見聞し当時中国で目撃したものを記録し、日本に伝えていた。一部の知識人は率先して伝統的な華夷観念から離脱したという状況も存在していたが、儒者流は中国の力への期待を持つのも少なくはない。例えば幕末で日清連携論を唱導していた勝海舟は地理的位置から考え、当時以下のように提案した。

「わが策は、当今亜細亞洲中、歐羅巴人に抵抗する者なし。これは皆規模狭小、彼が遠大の策に及ばざる故なり。今、わが邦より船艦を出だし、弘く亜細亜各国の主に説き、横縦連合、共に海軍を盛大にし、有無を通じ、學術を研究せずんば、彼が蹂躪を遁れるべからず、先ず最初、隣国朝鮮よりこれを説き、後、支那に及ばんとす」(勝安芳他編, 1972: 50)。彼はヨーロッパの強勢的な進出に対してアジアの無力を指摘し、隣国朝鮮と清国の共同抵抗という対策を講じた。他には、1871年日清修好条規もこのような提携思想がみられる。

しかし、日清が提携し外敵に対抗する征韓論以後日清の関係の悪化により、近代化の進まない清国の現状に対して日清提携論者が次第に清国改造論者へ変わった。典型的な例は福沢諭吉の「文明論之概略」である。他には貿易による経済的な提携から、さらに政治的な提携に至り主張した人もいた(池井, 1972: 14)。

さらに、明治維新以来、アジア諸民族との連帯を目指し欧米に対抗するのが一般に浸透しており、清国の現状を改造することでアジアの現状を挽回する思想も生まれた。上記では日清提携論と清国改造論を述べたが、1882年では朝鮮問題をめぐって壬午事変が起こってから、日清の関係は

緊張関係になり、日本は清国を仮想敵国として軍備拡張計画を推進し、清国の改造が不可能と判断する人も存在していた。さらに、日本は「アジアにおける近代化の先駆者」という意識を強め、朝鮮問題における日本側が遅れた朝鮮を進歩させるという指導者意識が強くなった（古屋，1996：50）。他には、1885年福沢諭吉の『脱亜論』が日本の自衛力増強に関心を払い、ある意味では膨張主義と一脈通じるものがあるようである（三輪，1973：411-412）。これはいずれも清国と強く対立し、日清戦争への道を促した。

日清戦争の前では、日本国内が清国を大国として考えて緊張感はまだ存在していた。しかし戦争後、日本が勝利を得たことによって、日本側が清国への蔑視を生み出し、優越感もあった。また、日本はアジアの盟主としてという役割を意識し、その後も徐々に強めた。それと共に福沢諭吉のように、欧米列強に加入し八福国宝船の初夢を懐く人はさらに多くなったと考えられる。

日露戦争の勝利によって日本の大国意識を強め、アジアから離脱し欧米先進国へ入った証明にもなった。その後、日本の朝鮮や清に対する優越感は一般民衆に浸透し（古屋，1996：54）、それは田中守平の『東亜連邦論』からも明らかに感じられる。「日本帝国天職の第一は、東亜列国の土地人民を開発啓導し飽くまで人道の擁護者となり、平和の担保者となりて、東西両洋の文明を一丸」（田中，1901）。つまり、日本の責任感、優越感やアジアにおける地位の正当化をするとともに、アジア文明の衰退を救うという日本の指導地位を強調するのが一見し、人道主義までの高度に言及し欧米へ対抗しようとした。

劉峰が、「1910年代後半期から1920年代末期まで……イギリスを覇者とする従来の世界秩序＝いわゆる「パックス・ブリタニカ（イギリスの平和）」に貢献しそれに服していた日本が、第一次大戦以来イギリスの覇権の衰退に乗じて、自らをアジアの盟主として新しい地域秩序の構築を練っていた時期である。これは必ず「アジア主義」の発展と緊密につながって

いるであろう」と述べた（劉，2014：12）。該当時期の「アジア主義」は、既存のイギリスなどの欧米国家が主導する植民地秩序に対抗することから、衰退しつつある秩序に対して、アジアで新たな秩序を構築する傾向が生まれたともいえる。

張寅性も近代日本の秩序構築について述べている。「……近代日本は東アジア地域の二つの勢力不均衡構図を敏感に受け止め、域内勢力不均衡を広げ、域間勢力不均衡を縮めようと試みた。域内不均衡の拡大と域間不均衡の縮小は、日本の国際権力による絶えざる秩序変更を意味するものであった。秩序の変動は正義を生む。正義は秩序変更への権力意志の表現であった」（張，2013：106-107）。張は日本がアジアに新秩序を構築しようとする時、正義な行為だと思われたと述べた。日本はヨーロッパと東アジア地域の勢力不均衡に対して、自分が主導し、新しい秩序を作り出そうという意志を生む。第一次世界大戦後、日本は国際上欧米列強と対等な地位となった。しかし、黄禍論が出ることによって日本の「入欧」は叶わなかった。この時期、日本は張が指摘したように、「闘争的国際社会観では〈日本対世界（西洋）〉構図が想定される。ところが、日本独りで西洋列強に対抗できないとき、東洋連帯による共同対応を想定する〈アジア対西洋〉構図が浮び上がる」、日本は「入欧」から「入亜」に変換した（張，2013：109）。日本はアジアへ回帰する事になったが、日本と対等に連帯できる国はアジアにはなく、結果としてアジア主義は日本の膨張主義、アジア侵略を正当化する論理となってしまった（渡辺，2006：50）。

野原四郎が「大アジア主義」に下した定義と、狭間直樹が論述したものにより、「大アジア主義」は日本のアジア盟主意識が突出し、「アジア主義」との区別は日本の優越を前提とした提携路線を進もうとするものである。日本の盟主意識は日清戦争まで遡られる。そして、日露戦争が強化させ、アジアへ回帰するのがさらに明確になった。

また、中国学界ではより辛辣な指摘がある。「近衛篤磨の『支那保全論』は「大アジア主義」が芽生えるのを示す、と言おうでしたら、1916年小

寺謙吉の『大亜細亜主義論』は「大アジア主義」の形成を示している」(戚其章, 2004: 144)。戚其章の見解により、「大アジア主義」は侵略を隠す手段としてのものであった。

日本では、1931年に入ってから「満蒙は日本の生命線」という言葉が流行り、日本国民の満洲に対する関心は高まった。1938年には近衛内閣が「東亜新秩序声明」を発表し、「帝国の翼求する所は、東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り」を表明し、「この新秩序の建設は日満支三国相携へ、政治、経済、文化等各般に互り互助連関の関係を樹立するを以て根幹とし、東亜に於ける国際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、経済結合の実現を期するにあり。是れ実に東亜を安定し、世界の進運に寄与する所以なり」(外務省, 2011: 405-406)。近衛にとって、「東亜新秩序建設」はアメリカやイギリスが営む国際秩序を打ち破り、公平、正義な行為であると張は指摘していた(張, 2013: 122)。このように、新秩序構築がアジアの不平等を消滅するという「正義」の行為は、日本の進出を正当化する名の下に隠したものともいえるだろう。

さらに、大東亜共栄圏構想は、昭和13(1938)年頃に作成された「国防国策案」を出発点としているようであり、防衛を含んで、経済の自給自足を求める(鈴木麻雄, 1998: 250-251)。その内容は、次の通りである。

一、国防の目的は東亜共栄圏を防衛するに在る。

二、東亜共栄圏は、自存圏、防衛圏、経済圏から成る。……経済圏は東亜共栄圏を賄うに必要な生産的資源供給地域とし、上記防衛圏竝印度、濠洲とする。

三、(省略)

四、(省略)

五、(省略)

六、東亜共栄圏の完成は努めて平和的手段によるべきも、已むを得ざる場合には武力行使を辞さない(後略)(防衛庁防衛研究所戦史室, 1973: 333-334)。

この「国防国策案」の中では、「東亜共栄圏」という言葉を使い、のちに発表した外相談の中で初めて出現した「大東亜共栄圏」という言葉の土台となっていた。松岡外相による大東亜共栄圏構想は、アジア解放といいながら、日本がアジアを指導することを肯定した。また、自国にとり必要な資源の取得を重視することを示しながら、武力の使用も承認した（鈴木、1998：254）。日本の国土面積の狭小により、資源の蓄積あまりにも楽観的ではない。日本が満洲権益への重視または、当時南進論を強調することはいずれも資源の獲得と関わっている。

前述から分析してみれば、大東亜共栄圏構想が誕生した要因は以下の点があげられると考えられている。

①天皇制国家の成立。大日本帝国憲法に決められた天皇制国家は、現在の象徴主義天皇制と違い、絶対主義天皇制国家であった。この成立は天皇を神格化し、弊害はあるが、国民の力が団結し最大限に動員でき、戦時状態には非常に有利である。

②国内資源の欠乏。大東亜共栄圏構想の土台、「国防国策案」が表明した目的から明確に分かる。日本の国土面積の狭小により、資源の蓄積あまりにも楽観的ではない。日本が満洲権益への重視または、当時南進論を強調することはいずれも資源の獲得と関わっている。

③秩序構築の構想。アジアは長期的に列強が作られた秩序の下で生存した状況に対して、日本が提携論を提唱したり、「脱亜論」を宣伝したりする中で、〈日本対西洋〉の方法を模索していた。しかし、第一次世界大戦後黄禍論の影響により、〈日本対西洋〉というより〈東洋対西洋〉の考えも浮かび上がった。同時にイギリスの覇権が徐々に衰退し、模索しているなかで、日本が主導の東アジア国際社会を描き出した。

「東亜新秩序」を構築する声明では対等な関係を作り、その後共栄共存圏を構築しようとする宣言も表明したが、結局のところ軍事手段を使い、欧米と同様に侵略行為を行った。

「アジア主義」の変遷から考えてみれば、アジアは長期的に列強が作ら

れた秩序の下で生存した状況に対して、日本が提携論を提唱したり、「脱亜論」を宣伝したりする中で、〈日本対西洋〉の方法を模索していた。しかし、第一次世界大戦後黄禍論の影響により、〈日本対西洋〉というより〈東洋対西洋〉の考えも浮かび上がった。同時にイギリスの覇権が徐々に衰退し、模索しているなかで、日本が主導する東アジア国際社会を描き出すようになった。歴史から見れば、「アジア主義」は一つの対ヨーロッパ政策ともいえるし、対アジア諸国の政策ともいえる。

確かに、「アジア主義」は劉峰が述べたように、「……アジアに対する優越感や指導者意識に基づいて、日本によるアジアの「指導」を「天職」や「道義」として主張することで帝国主義的な侵略を隠蔽した過去を想起させる。このような性格をもった「アジア主義」こそ、のちの「東亜新秩序」、「大東亜共栄圏」の理論的基礎となり、アジアの人民に忘却できない苦しみを与えたものなのである」(劉, 2013: 2)。しかし、前述したように、「アジア主義」はヨーロッパに対抗するために生まれたもの、という面も無視できない。現在では近代の「アジア主義」とは異なり、現代に使われる「アジア主義」の可能性を探っている。新時代の「アジア主義」を作り出す議論もあり、中国外相王毅も新しいアジア主義に関する演説を発表することがあった。新時代の「アジア主義」は「アジア主義」そのものと言えるのかについて諸説紛々だが、筆者が、新時代の「アジア主義」は過去の「アジア主義」とは切り離し、過去の「アジア主義」は既に終焉したと考えられる。

3.1 中国が唱えている「アジア主義」

3.1.1 孫文の「大アジア主義」

関偉によれば、李大釗の「新アジア主義」が孫文からの影響を受けている(関, 2003: 53-54)。そのため、まず孫文の「大アジア主義」を検討する必要がある。

「アジア主義」は日本がアジアの盟主を主張する根拠として用いる思想となったが、初期の「アジア主義」は中国でも積極的に唱えられた経緯がある。日本の政治学者である嵯峨隆（2020）によると、孫文によるアジア主義の言説は、1924年神戸での『大アジア主義』講演が有名である。しかし孫文は最初にアジア主義を語る事例は1897年横浜で宮崎滔天と出会った際である。彼の言論は当時人種論と日中提携論両方とも含まれている。しかし、孫文のアジア主義には「世界主義」的な傾向があり、日本が唱えているアジア主義と根本的な違いがある。後に孫文がフィリピンを解放して中国革命を成功させる行動を意図する、と嵯峨が指摘している。嵯峨により、孫文がアジア連帯を唱える基盤は中国の革命達成であるが、日本の支援を獲得するために日本のアジア主義に接近している。

中華民国成立（1912年）以降、孫文は公然とアジア主義に言及する。その時期、孫文が訪日する目的は主に二つがある。一つ目は日本の援助を得るためである。もう一つは日中が連盟し欧米同盟に対抗する。1913年、孫文は「アジアはアジア人のアジアである」を語り、日本はイギリスに対する不信感から日本思想界で潮流になったアジア・モンロー主義に近い。

竹本友子の定義によれば、モンロー主義は1821年に米大統領モンローは議会への教書で、先の植民地主義の否定を繰り返すとともに、アメリカとヨーロッパの相互不干渉の原則を表明し、ラテンアメリカ諸国へのいかなる干渉も、合衆国に対する非友好的態度とみなすことを宣言するのが発端である。さらにアジアモンロー主義は1898年に近衛篤磨が「亜細亜のモンロー主義」を打ち出したことが始まりとされる。アジアの平和と秩序を維持する責任はアジア人のみがもっており、欧米諸国の干渉を許さないという主張が中心である²。

嵯峨（2020）により、1917年に孫文は第一次世界大戦中の日本を批判し、1919年の日本批判がさらに目立つようになったと考えられる。しかし、

2 モンロー主義は『日本大百科全書』を参考し、アジアモンロー主義は『ブリタニカ国際大百科事典・小項目事典』を参考する。いずれもデジタル版である。

日本に対する批判をしながら、日本の支援と日中連携に期待を持っている。

孫文は講演『大アジア主義』(1924)の中では、日本が日露戦争に勝利を収めたことをアジア復興の起点と呼び、日本の勝利は全アジアに影響を及ぼし、大きな希望を抱かせるようになったと評した。さらに、孫文は西洋の覇道文化と王道文化の相違点を分析し、アジアの道徳は西洋より優れていると指摘した。孫文は一つの例を挙げて覇道文化と王道文化のどれが人道に有益であるかと指摘した。中国は独強であった時代、弱小国家は中国に朝貢することを光栄とし、朝貢しないことを恥辱とした。その理由は中国が完全に王道を用い彼らを感化したからである。しかし英国は中国のような程度に至らなかった。孫文の解釈では、西洋の覇道文化は武力行使の文化であり、東洋の王道文化は儒家の仁義道徳を行使する文化である。孫文によると、日本はすでに西洋の覇道文化を取り入れたが、本来、アジアの王道文化も持っている。しかし、当時の日本は輸入された覇道文化しか用いていないことを孫文は厳しく批判する一方で、アジアの諸民族は団結して西洋に対抗すべきだと呼びかけた³。

孫文の『大アジア主義』は、日本の侵略的本質に失望し、これと完全に決別する意図が表明されたが、孫文は諸民族が連帯する必要性も述べている(嵯峨, 2006: 28)。劉峰と田波の指摘によれば、孫文が唱えた「アジア主義」は、日本の主張に共鳴するものではなく、絶望や不満の表現であり、「抵抗と言論としてのアジア主義」であったのである。しかも、この「アジア主義」の考え方は、当時の中国のナショナリズムと非常に密接に関係しており、その延長線上に、アジアの「被抑圧民族」の命を守るために団結するという「アジア主義」を追求していたとも言える(劉・田, 2020: 177-190)。

関偉(2000)によれば、孫文は中国近代革命の先駆者として、中国の独

3 孫文, 1924, 『大アジア主義』(神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 人種問題 (2-019)) デジタル資料を参考。

立、アジアの復興、世界の平和のために苦心奔走した。彼の中国・日本およびアジア・世界の認識を最も強く表す政治思想が「大アジア主義」だと指摘した。さらに、1917年のロシア十月革命および1919年の五四運動の発生、また中国共産党と知り合ったことは、孫文に日本の帝国主義の本質をはっきりと認識させることとなり、日本は「盟主」としての資格を失ったと考え、ロシアをアジアの一員であると見なし、さらには全世界の被圧迫人民が人種を区別しないで団結し、帝国主義に抵抗しようと提唱するに至った（関，2000：41,52-53）。

このように、孫文は日本に亡命した時に、宮崎滔天らの影響を受け、日本の「大アジア主義」を受け入れ得る基盤となった。孫文は中国の独立とアジアの復興に尽力することからもアジア主義の理念が見られる。また、東亜同文会に所属した犬養毅は、孫文、頭山滿と同じくアジア主義の代表人物である。犬養は1911年に孫文らの辛亥革命の援助のため中国に渡ったことがある。アジア主義者は辛亥革命を援助し、封建王朝の打倒に努力をし、「アジア主義」と中国との関わりは深いと考えている。

3.1.2 李大釗の「新アジア主義」

本稿で主に研究している李大釗の言説——本稿では「新アジア主義」として区別する——の用例は、孫文からの影響によるものとされる。さらに関偉は李大釗が「新アジア主義」を提出する理由にもう二つがあると考え、関によれば、マルクス主義の影響から民族自決を主張するという影響と、アジアの侵略された国や地域悲惨な状況を見て衝撃を受けたという影響もある（関偉，2003：53-54）。

李大釗は早稲田大学に留学し、日本で社会主義思想やマルクス主義思想に触れ始めた。彼は中国共産党の創設者の一人であり、最初に中国の人々にマルクス主義を広めた人である。彼は孫文の「大アジア主義」から影響を受けて、日本側のアジア主義に反論しながら、自分の新アジア主義を提出した。

李大釗は、「現在のヨーロッパの戦争は全世界に影響を与えている」と明確な分析をしていたが、これは「人種紛争」に帰結しない。その理由は、「大……主義」が多すぎて、「大というのは人々の欲望」、「戦争を引き起こすに違いない」からである。李大釗の考えでは、いわゆる「大……主義」こそが、明らかに他人から孤立し、民族間の対立を激化させたのである。李大釗は、「新アジア主義を再論する」という記事を全国誌に発表し、新アジア主義が「日本の大アジア主義に対抗するために提唱された」ものであることを明確に指摘した。日本の大アジア主義の圧迫があったからこそ、「新アジア主義の旗が掲げられた」のであり、新アジア主義は「日本の大アジア主義に対抗する」ものであって、欧米に対する排外主義ではない、という目的が明確に述べられた(邓凤瑶, 2015: 72-73)。

嵯峨隆『アジア主義全史』(2020)の中では、李大釗が日本側のアジア主義に反論して新アジア主義を提出した過程を記述した。彼は1912年に、中島端の『支那分割の運命』に反論して、モンロー主義は日本による中国独占の代名詞であると批判した。李大釗にとっては、列強による分割の危機はもちろんのこと、日本のアジア主義が極めて悪印象をもって受け止められていた。また、1917年に、李大釗は「極東モンロー主義」という論説を発表し、当時の南北アメリカと現在の東アジアの状況とは全く異なっていると指摘した。ここでの「極東モンロー主義」は「アジア・モンロー主義」のことを指している。彼は、一つの国がモンローの政策に倣おうとしているが、東アジアの秩序に背馳すると批判し、明確に「一つの国」を言わなかったが、日本を指している。さらに、1917年、若宮卯之助の「大亜細亜は何ぞや」に対する批判をし、「ある一国」がアジアの主人公であると自惚れるのは禍を生じかねないと指摘した。

李大釗は日中提携による「アジア主義」を認めていたことが理解できるが、中国の民族主義の発展を前提としつつ、そして当時の日本の論壇に見られた日本盟主論を否定した。1919年、李大釗は「大アジア主義と新アジア主義」を発表し、中心理念は日本と中国を連盟してからアジア連邦を

結成し、さらに欧米の連合と並立し、最後には共同して世界連邦を完成するという事である。嵯峨は、李大釗の「新アジア主義」は、国際連盟のような制度的枠組みを超えるコスモポリタニズム的傾向を持っていたと考える。人種を超えて世界主義を志向する点は「新アジア主義」最大の特徴であり、その基底は民族の平等という点である。この点についてはマルクス主義の特徴が見られる。このように、李大釗の「新アジア主義」は日本盟主論に基づいた「大アジア主義」と真っ向から対立すると述べられる。

おわりに

「アジア主義」は、中国の敗戦または不平等条約と同じ遭遇した日本が自救するため提出した概念や方式である。この概念は、当初から「提携」と「侵略」の二面性が展示され、明治維新後の日本の国力増強により、日本の盟主意識が徐々に増強した。アジア諸国を提携し欧米列強の侵略と対抗する中で、アジアの中心となりアジア諸国に連れ対抗する傾向が表した。欧米がアジアにおける秩序を作り、不平等な現状を受け止め、自分が主導して新しい秩序を作り出そうという意志を生むようになった。これとともに、国際社会では新たな地位を求め、「脱亜」して欧米列強に入り込む意欲も浮かび上がった。しかし第一次世界大戦後欧米諸国が日本を差別する状況に対して、日本は「脱亜」を諦めて再び「入亜」し、「日本対西欧」より「アジア対西欧」の道を歩んだ。

日清戦争が疑いなく清国に衝撃を与え、清国が派遣する留学生の行き先傾向にも影響を与えた。後に中国革命の中で多大な貢献をしていた李大釗は留日潮流に乗り、清国を救うために西洋知識を学んだ。彼は留日を通して日本学界の流行も把握し、「アジア主義」に関する情報を手に入れ、批判をするとともに、新たな思想を提出した。

これまで多くの研究者たちが「新アジア主義」と李大釗について、数多くの研究を発表している。また、李大釗の学術研究はマルクス思想の中国

伝播が多いのは特徴である。本稿は今までの李大釗研究成果に沿い、李大釗自身の言論や受けた影響を分析し、李大釗が唱えている「新アジア主義」の変遷過程を探り明らかにした。本稿では言及していないのは、李大釗の「新アジア主義」と中国革命の関わりである。この検討課題は今後に続き分析する必要があると考えられる。

参考資料

- 飯倉章, 2013, 『黄禍論と日本人 欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』中公新書。
- 池井優, 1972, 「日本の中国観」『アジア研究：アジア間の再検討 (特集)』18(4): 13-25。
- 王玉珊, 2010, 「中国人日本留学の歴史問題について」『中央学院大学社会システム研究所』10(2): 99-106。
- 王曉雨・陳其松, 2019, 「清国人日本留學生の見た『世界』とその言説」『北東アジア研究』30: 19-31。
- 勝海舟, 1972, 「海舟日記」勝安芳、勝部真長、松本三之介、大口勇次郎編『勝海舟全集18』勁草書房。
- 金光男, 2012, 「幕末の朝鮮観に関する一考察：吉田松陰を中心として」『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』第54巻: 29-47。
- 嵯峨隆, 2006, 「孫文のアジア主義と日本：『大アジア主義』講演との関連で」『法学研究：法律・政治・社会』79(4): 27-59。
- 嵯峨隆, 2020, 『アジア主義全史』筑摩選書。
- 周一川, 2020, 『近代中国人日本留学の社会史：昭和前期を中心に』東信堂。
- 鈴木麻雄, 1998, 「大東亜共栄圏の思想」岡本幸治編, 『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房。
- 関偉, 2000, 「孫文の『大アジア主義』と日本の大アジア主義」『人間文化学研究集録』9: 41-55。
- 田中守平, 1901, 「東亜連邦論 (六)」『日本人 (第三次)』414号。
- 張振性, 2013, 「近代日本の国際社会観 『秩序』と『正義』」平野健一郎ほか編, 『国際文化関係史研究』東京大学出版会。
- 古屋哲夫, 1996, 「アジア主義とその周辺」古屋哲夫編, 『近代日本のアジア認識』緑蔭書房。
- 富田正文・土橋俊一編, 1981, 『福沢諭吉選集第7巻』岩波書店。
- 狭間直樹, 2001, 「初期アジア主義についての史的考察(1) 序章 アジア主義とは何か」『東亜』410: 68-77。

- 橋川文三, 1973, 『順逆の思想—脱亜論以後』勁草書房。
- 平野健一郎, 1991, 「文化変容」松崎巖編, 『国際教育事典』アルク。
- 星野朗・長谷安朗・松村吉郎・三宅博之, 1992, 『地球を旅する地理の本2 アジア』大月書店。
- 三輪公忠, 1973, 「アジア主義の歴史的考察」平野健一郎編著, 『日本の社会文化史4 日本文化の変容』講談社。
- 藤井昇三, 1985, 「孫文の『アジア主義』」辛亥革命研究会編, 『中国近代史論集 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院。
- 防衛庁防衛研究所戦史室, 1973, 『戦史叢書 大本営陸軍部 大東亜戦争開戦経緯(1)』朝雲新聞社。
- 山田昭次, 1969, 「自由民権期における興亜論と脱亜論——アジア主義の形成にめぐって——」朝鮮史研究会編, 『朝鮮史研究会論文集6』: 40-63。
- 劉峰, 2013, 「近代日本の「アジア主義」再考——研究史と課題の整理——」千葉大学大学院人文社会科学研究科, 『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』264: 2-22。
- 渡辺良智, 2006, 「日本人のアジア認識」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』14: 33-54。

中国語資料 (アルファベット順)

- 邓凤瑶, 2015, 「李大钊的新亚细亚主义评析」『昭通学院学报』37(2): 72-74。
- 丁相顺, 2001, 「晚清赴日法政留学生与中国法治近代化的再思考」『金陵法律评论』1: 128-136。
- 关伟, 2003, 「论李大钊的新亚细亚主义——兼谈孙中山大亚洲主义之变迁」『北方论坛』6: 51-55。
- 李彬彬, 2020, 「赴日留学生与马克思主义在中国的传播及影响」『党史博采(下)』5: 22-23。
- 劉峰、田波, 2020, 「日本大正期の“亚洲主义”浪潮与中国的回应——兼论孙中山的思想与中国民族主义」『世界史評論』2: 177-190, 264-265。
- 戚其章, 2004, 「日本大亜細亜主義探析——兼與盛邦和先生商榷」『歷史研究』3: 132-145。
- 施娜, 2020, 「重新审视李大钊马克思主义思想的形成过程——基于日语文献的考察」『太原学院学报(社会科学版)』6: 20-28。
- 唐萍, 1995, 「李大钊与中国共产党的创建」『盐城师专学报(哲学社会科学版)』4: 72-74。
- 韦英思, 1995, 「孙中山的“大亚洲主义”与李大钊的“新亚细亚主义”之比较」『青海民

族研究（社会科学版）』1：77-82。

于海英，2016，「浅谈李大钊与中国共产党的创建」『党史博采（人物研究）』9：19-20。

赵莎，2021，「陈独秀塑造新青年思想及其当代价值」『思想政治课研究』1：14-24。

参考サイト

「アジア・モンロー主義」『ブリタニカ国際大百科事典・小項目事典』。

[https://kotobank.jp/word/ アジア・モンロー主義 -25182](https://kotobank.jp/word/アジア・モンロー主義-25182)（閲覧日2021/7/15）

孫文，1924，『大アジア主義』神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 人種問題（2-019）。

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=10014630&TYPE=IMAGE_FILE&POS=1（閲覧日2021/8/2）

「モンロー主義」『日本大百科全書』。

[https://kotobank.jp/word/ モンロー主義 -143383](https://kotobank.jp/word/モンロー主義-143383)（閲覧日2021/10/16）

吉田松陰，1854，『幽囚録』。

<https://ja.wikisource.org/wiki/%E5%B9%BD%E5%9B%9A%E9%8C%B2>
（閲覧日2021/7/15）